

『オーストリア文学小百科』紹介

荒 又 雄 介

「オーストリア文学小百科」（以下「小百科」と略記）の企画について初めて耳にしたのはずいぶん以前、80年代の終わりごろのことである。いかにも息の長い仕事であったが、それに十分見合う充実の内容であり、仕上りの完成度も高い。事項396、人名650。事項は文学のみに限らずに広範な領域から採られ、オーストリアの外で活躍した人物も収録されて、それぞれの確な解説が付されている。

前書きによると、この類の書物は本国オーストリアにもないという。ウクライナ（ガリツィア）出身のロートもプラハのゲットー生まれのカフカも、あるいはローマ教会の直轄領であったザルツブルクのモーツァルトも当然のごとく同国人とみなすこの国には、一般読者向けに書かれたオーストリア作家乃至芸術家列伝が多数あり、「小百科」のような網羅的啓蒙書が存在しないとは少々意外であったが、これはすなわち、「小百科」の編者が、項目選択に際して、直接手がかりとすべき書物を持ち得なかったということである。各項目の記述の背後に費やされた労力の大きさをや想像に余りある。

さっそく紐解いてみると、各項目の記述は簡潔にして明瞭、それでいて辞書的な無味乾燥に陥らない。重要と判断された事項には思い切った字数が当てられ、他の項目との重複もあえておそれず、項目一つで読者にまとまった知識を提供しようという意図が見受けられる。他方、若い世代にとってありがたいのは、項目間の関連付けの充実であろう。いわばページ間に縦横にリンクが張られているわけで、長大な大論文を読むよりは小さな情報のつまみ食いに慣れた世代でも、知らぬ間にオーストリア文学の深い森の中に迷い込む仕掛けである。同じ項目から読み始めても、読者によって引っかかるリンクが異なり、それによって分け入る先も、読書のとりあえずの終点もおのずと異なってくる。特定の関心を持って本書を手にとれば、当該の関心領域についての一通りの知識が得られる。これで本書は十分その任を果たしたことになるわけであるが、少しよそ見をする余裕があるなら、読者は新しい世界への扉がいたるところで開かれることに気づくに違いない。思わぬ場所へと読者をいざなう力が「小百科」には備わっている。評者自身、同じ場所から何度読書をはじめても行き着く先はもちろん、その道のりも毎回異なって、いつも新たな知識を与えられている。各項目の記述の充実がその最大の理由であることはもとよりである。

また、本書の特長の一つに現代のオーストリア文学への目配りが挙げられよう。与えられた字数は必ずしも十分でなく、またもっぱらドイツ語作家に限定されるきらいがあるとはいえ、日本に翻訳紹介されていない作家も多数収録されて、「次に読む作家」を探してい

る読者にとってありがたい道しるべとなっている。現役作家についての周到な目配りは、本書を開いて最初のうれしい驚きだった。さらに雑誌、新聞といった文学メディアにも個別に項目が与えられていて、これが現代オーストリアの文学シーンの一場面を垣間見させてくれる。

文学雑誌や舞台などのメディアについては、現代だけでなく、より古い時代の記述も充実している。作家からのみならず、メディアの展開からも時代の空気が再現されるようになっているわけだが、その記述の厚みと充実した関連付けは、日本におけるオーストリア研究の充実ぶりの一端を示すものであろう。文学を読み始める若い読者は、言葉の制約もあって、数人の作家を通して時代や社会を見ることにならざるをえないが、そういった読者にもう少し大きな窓を与える役割を、こういった項目は果たしてくれるに違いない。読書の中で出会い、気になりながらも放っておいた出版社名や雑誌名、あるいは俳優や演出家の名前等々。これらを気軽に引ける「小百科」は、様々な形で読書の楽しみを広げ、深めてくれることになるだろう。

付録についても一言。多言語多民族の国家であったオーストリアの地名は一通りではない。付録として添えられている地名対照表(ドイツ語、ポーランド語、チェコ語、スロヴァキア語、ハンガリー語、ウクライナ語、ルーマニア語、スロヴェニア語、セルボクロアチア語、イタリア語)には帝国時代の所属帝国直轄領名も添えられて、東方に広がる旧帝国の文学にはじめて触れる読者の便宜を図っている。これらの地名が書き込まれた地図も同様である。このあたり、本国を遠く離れた国の研究チームならではの地道な作業の成果であるが、この地図をちょっと広げるだけで、例えばロートの作品の一節が突然鮮やかな像を結ぶなどということも、きっとあるはずである。

考えてみると、ドイツ文学に関してこの類の百科事典がないまま、我々の手元に「オーストリア文学小百科」が届けられた形である。ドイツ語で書かれた文学を「ドイツ文学」ととりあえず呼び習わすことに大方異論はなからうが、そこから切り離して、その一部をオーストリア文学とすることに対しては、様々な意見があるに違いない。実際、一定の条件付けのもとで、特定のドイツ語テキストをオーストリア文学として括っているわけだが、その条件および背景は必ずしも明瞭ではないのだ¹⁾。他方、オーストリアの文学は、ドイツ語以外の言語にも広がっており、これがオーストリア文学の定義を更に難しくしている²⁾。

ドイツ語の世界ではドイツ文学から自らを十分に切り離せず、旧帝国領土内においては

1) 本書には「オーストリア文学」という見出しがあり、そこでは「オーストリアのドイツ語文学」とひとまず定義されている。しかし、その独自の輪郭の確定が容易ではないことが指摘され、これに続けて「オーストリア文学史研究」の見出しが畳み掛けられて、定義に関する諸家の議論が紹介されている。

2) 本書でもイタリア語で展開された宮廷文学やイディッシュ語の文学について独立した見出しが立てられている。

複数の言語の波にさらされている。そうした中、そもそもオーストリア文学なるものなど存在しない、と一刀両断に言い切れば、それはそれで齒切れもよいが、オーストリアで書かれた文学作品には、他とは違う独特の傾向が見て取れるのも事実であろう。これを「小百科」は当地の文学の特質として大胆に抽出する。抽出作業に際してはマグリスの「ハプスブルク神話」をはじめとする古典的な諸テーゼを背景としつつも、その網にかからないような要素も最新の研究成果を踏まえて拾ってあって、オーストリア文学の姿を可能な限り偏りなく示そうとする編者の努力が見える。「オーストリア的なもの」については、今日もなお、新たな視点で問い直されており、今後も社会情勢の変化のたびに議論は流動的になるに違いない。「小百科」の読者はおのずとこの問題に向き合わされる。ここに「小百科」の最大の特徴があるといえるだろう。

いずれにせよ、オーストリアで書かれた文学の理解には、その歴史的、社会的、あるいは政治的背景の知識が不可欠であり、例えばケーニヒグレーツにおける歴史的敗戦³⁾のようなオーストリアのドイツ文化圏が経験した歴史的な事件は、異国の我々が当地の文学に接するにあたって、やはり一般的常識として知っておいたほうがよいだろう。あるいはカーレンベルクと聞いて何も連想されないようでは、作品理解の妨げになるに違いない。こういった事柄をコンパクトに伝えていることだけでも、「小百科」には大きな意味があると思う。オーストリア文学なるものを今なお設定することの是非は、本書を紐解いた後に各人が判断することである。

これは日本だけの現象ではなかったが、1980年代の世紀末ブームによって、オーストリア文化の受容は、ひととき活況を呈した。前述のマグリスの『オーストリア文学とハプスブルク神話』が重訳の形で日本に紹介されたあたりがその頂点であったかと思われる。繰り返し言及されながらも、原本がイタリア語であるためもあって一向に翻訳されることのなかったこの書物の紹介は大変歓迎されたが、その際、翻訳陣の専門分野紹介欄に「オーストリア文学」と書き込まれていたのが、評者の記憶に今なお鮮明である。すでに多様な展開を見せていた都市論と連動し、さらに哲学、思想、造形芸術、建築、音楽など隣接の分野とも行き来の自由な議論が、当時多くの読者を魅了した。ファッション雑誌にさえ「世紀末ウィーン」特集が生まれ、単なる紹介にとどまらない記事が掲載された。「小百科」の企画が具体的に整ったのは、まさにこのような時期と重なるのではないかと推察される。

オーストリア文学への関心が、再び当時のような広がりを見せるとは思わない。文学を自身に身近な問題として受け止める読者の数に、時代によってそれほどの変動があるとは思わないが、当時のように隣接分野の専門家がいっせいにこの国の文化に取り組むという勢いは今はない。しかし、冷戦終結後、当たり前のように中欧という言葉が復活し、欧州

3) 1866年普墺戦争の勝敗を決定づけた戦闘の行われた地。この戦争の敗北は、大ドイツ主義の事実上の崩壊を意味し、さらには翌年のハンガリー独立の引き金ともなった。これによって、オーストリアのドイツ系知識人はアイデンティティーの基盤の再考を迫られることになる。

拡大がしばしば話題に上る昨今、旧帝国の記憶がいわば亡霊のように再び立ち現われる場面に、我々はしばしば出くわしている。多言語多民族の国家連合を国民国家に対立させるとき、複数の国家が一人の皇帝の下にゆるくまとまっていたオーストリアという国が、様々な形で思い出されてくるのだろう。ハプスブルクの神聖ローマ帝国、そしてオーストリア・ハンガリー二重帝国と形を変えながら国民国家の時代を生き延びた半ば中世的な老帝国のイメージは、欧州に暮らす人々に、また新たな光のもとに立ち現われてきているのかもしれない。

時代の空気、そこで生きた人の生活を切り取り保存するのは文学の重要な役割の一つである。オーストリア文学には古きオーストリアが、あるいは格式ばった記念写真のように、あるいは肩肘の張らないスナップショットのように閉じ込められている。戦後、人口わずか700万のアルプスの小国に転落した後の、新たなるアイデンティティー模索の苦しみもまた、その表現の中に繰り返し定着されてきた。今日なお旧帝国が言及されるとき、これらの記憶が渾然一体となって発動している。文学の読者は個々の作品の表現を楽しめばそれでまずは十分なのだが、作品の背景と未来への射程を感得できれば読書の喜びは倍増するはずである。「小百科」はこうした期待に答えつつ、スラブの香り漂う中欧の豊かな文化に読者を誘っている。